

小学部高学年グループ研究

1. 研究グループの概要

- ・高学年Iコース（知的障害）在籍児童15名（4年生5名、5年生3名、6年生7名）
- ・研究グループの構成は、担任8名＋学部主事1名

2. 研究経過

他グループと同様に、国語・算数の授業実践を一人一事例を行った。

- ①『「ラーニングマップ」から学びを創り出そう』のチェックシートを用い、複数教員で実態把握を行う。
 - ②研究部が示した枠に授業実践を入力する。
- 実際に取り組んでいく中で、以下の課題が挙げられた。

- ①各単元に対する「目標」が具体的である。（活動名や教材名が入っている。）
評価規準・評価基準を立てる前に、目標の立て方を見直す必要があるのではないか。
- ②明確な評価規準を立てるために、根拠が必要である。
- ③人によって評価規準、評価基準の意味の捉え方や立て方にばらつきがある。

そこで小高グループでは、上記の三点の課題について検討していくために『特別支援教育サポートBOOKS 特別支援学校学習指導要領 目標―指導―評価を一体化する「国語」「算数・数学」の学習評価』の実践方法に則い、国語・算数における分野（例：算数であれば数と計算、測定、図形等）の、児童の実態に応じた段階の目標を学習指導要領から引用し、各単元で学習する内容の評価規準を考えていくこととした。

授業実践シート

R4 授業実践シート～指導と評価の一体化を目指して～

教科等	算数	単元名	20までの数（A 数と計算 小学部3段階）
学年	○年	児童名	A
指導者	※		
目標	知・技	<ul style="list-style-type: none"> ・100までの数の概念や表し方について理解し、数に対する感覚を豊かにするとともに、加法、減法の基礎について理解し、これらの簡単な計算ができるようにすることについての意図を身に付けるようにする。 ・日常の事象について、その場面を題材し、具体物や図などを用いながら数の数え方や計算の仕方を考え、表現する力を養う。 ・数直線の違いを理解し、算数で学んだことのよさや楽しさを感じながら学習や生活に活用しようとする態度を養う。 	
評価規準	知・技	<ul style="list-style-type: none"> ・5や10のまとまりを作って、20までの数を答えることができたか。 	
	態・情・表	<ul style="list-style-type: none"> ・5や10のまとまりに基いて、数の数え方について考え、学習や生活に生かすことができたか。 	
	態	<ul style="list-style-type: none"> ・5や10のまとまりにして数えるよさに気づき、身の回りの具体物の数直線を通して数えようたり数字で表そうたりすることができたか。 	
①どんな授業にしているの？（どんな力をつけるために、どのような授業づくりをするか）			
☆学習や生活の中で身の回りの数の数え方を考えて表現する力が付く授業。			
★10以上の数は、おおよそ数えられているが、これらより大きな数を理解するために、まとまりとして数え答えることができるようになること。			
・限定枠や自由枠、10までの数、20までの数を組み合わせて段階的に行う。			
・バラのタイルを操作して、数直線が実感できるようにする。			
・数直線が数えられるようにタイルを数えながら、手紙で数直線を示していく。			
②指導と評価の実践①			
	知・技	<ul style="list-style-type: none"> ・限定枠を用いて5や10のまとまりを作って、数を答える。 	◎
	態・情・表	<ul style="list-style-type: none"> ・タイルの数に応じて5や10の限定枠を選び、まとまりを数直線して数を数えようとする。 	◎
	態	<ul style="list-style-type: none"> ・具体物や半具体物を用いて、教師と種かめながらまとまりを正確に作りながら数を数えようとする。 	○
<児童の様子>			
・限定枠を用いるとバラのタイルを入れたらまとまりを作り、まとまりの数から数え始めて、数を数えることができた。			
・自由枠になると、5や10を正確に数えることができず、間違えることが多い。			
・数を数えようとして、5と10どちらの枠を用いようか悩まないうちに手紙が写された。			
・教師が指さしながら手紙で示すことで正確に数え、間違ったことに気づくが、困そうと一から始めると数え間違える。			

目標

チェックシートによる実態把握をもとに学習指導要領の各段階の目標を記載し、最終的に身に付けたい力を明確にする。

評価規準

学習指導要領各分野の内容に記載されている文言を用い、力を身に付けることができたかを評価できるようにする。
※◎○△を削除

評価基準

評価規準を具体化し、規準を達成できたかを判断する指標となるもの。（本時のどの場面、言動で評価するのか。）



3. 研究の成果

①目標の立て方について

- ・学習指導要領を基に大きい目標を設定することで、**教科を通して児童に身に付けさせたい力が明確になり**、各単元の評価規準を統一した視点で立てることができた。
- ・複数教員による適切な実態把握のもと学習指導要領を参照することができたため、**児童の実態に合った目標**を立てることができた。

②根拠のある評価規準について

- ・学習指導要領の内容を根拠に考えることで、**目標に準拠した評価規準**を立てることができた。

③捉え方について

- ・実施方法について**指標**となるものを用意して実践を行うことが、教師間の捉えを揃えることに有効であった。

4. 次年度に向けて

今年度の研究で、参考文献に則り、学習指導要領の文言を根拠とし目標を立てることで評価規準、評価基準とは何かを系統的に知り、教師間で捉え方を揃えることに繋がった。これからの学習評価に必要な考え方を知り、実践の中で深めることができた。今年度固めた基礎を、来年度の授業実践へ生かしていけるとよい。

指導と評価の一体化を目指し、来年度は集団授業の実践を通して授業の充実を図っていく。児童にどのような力を身に付けさせたいかを明確にし、評価規準や評価基準の考え方を日々の実践に取り入れることで、児童一人一人に適切な学習評価ができるよう、実践を深めていきたい。